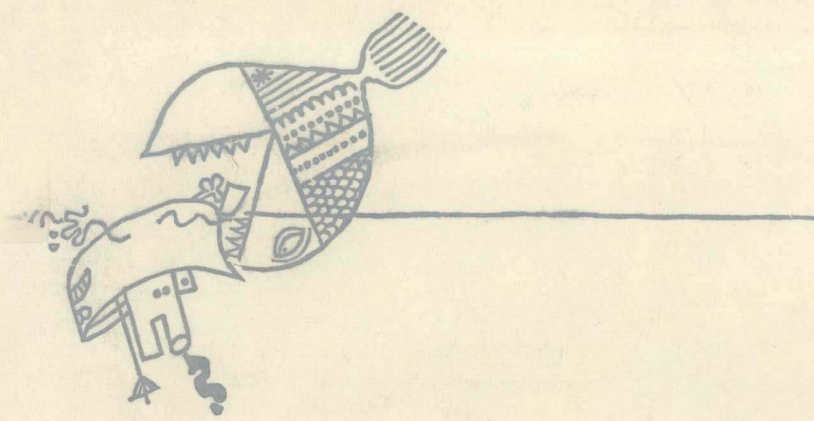
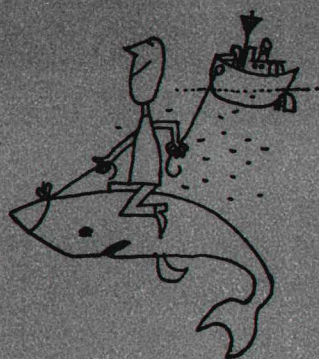




どくとる
マンボウ

北杜夫



航海記



どくとるマンボウ航海記 ©1960 定価 330 円

昭和35年 3 月20日初版発行 昭和43年 4 月27 日64版発行

著者 北 杜夫 発行者 山 越 豊 印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社 東京・京橋 2-1 振替東京34 三晃印刷 協和製本

どくとるマンボウ航海記 目次

私はなぜ船に乗ったか

これが海だ

飛ぶ魚、潜る人

シンガポールさまざま

マラッカ海峡からインド洋へ

タカリ、愛国者たむろすスエズ

ドクトル、閑中忙あり

アフリカ沖にマグロを追う

ポルトガルの古い港で

ドイツでは神妙に、そして

小雪ふるエラスムスの街

霧ふかいアントワープ

パリの床屋教授どの

わが予言、崩壊す

ゴマンとある名画のことなど

盲腸とアレキサンドリヤ

海には数々の魔物が棲む

本の話から船乗りのこと

コロンボのカレー料理

帰ってきた燕とマンボウ

あとがき

103

116

124

140

146

160

168

176

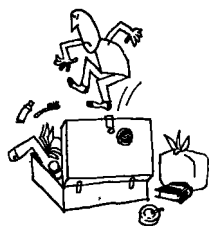
184

192

202

どくとるマンボウ航海記

私はなぜ船に乗ったか



マダガスカル島にはアタコロイノナという神さまみたいなものがあるが、これは土人の言葉で「何だか変てこりんなもの」というくらいの意味である。私の友人にはこのアタコロイノナの息吹きのかかったにちがいない男がかなりいる。一人は忍術を修行せんとして壁に駆けのぼり、墜落して尾骶骨にヒビをいらした。一人はリングを三十八箇むさぼり食って自殺を企てた。一人は学者としておとなしく講義でもしていればいいのに、スパイになりたくて汲々としている。こういう連中がいなかったなら、私は船になんぞ乗らなかつたかも知れない。

先年、私はドイツ国に渡ろうと思い、まず神妙に留学試験を受けたところ、あろうことかあるまいことか、文部省当局は私を書類銓衡でふるい落した。私はフンガイし、それならば銓衡委員をだまくらかすため節を屈して論文のひとつも書くかと思案していたところ、Mという男が私に智慧をつてくれた。

Mは私の勤務している医局の先輩で、ちょうどニューヨークの或る病院に一年勤めて帰ってきたばかりだったが、これは彼の初志に反することで、本当はもっと世界を放浪するつもりだったらしい。渡米前、彼は研究室にこもりガラス管をいろんなふうにひんまげ、一方の端にさした煙草の煙がフラスコに満たした水中をくぐる装置を作りあげた。彼がいうには、これぞ中国伝来の水煙草であり、肺癌におびえるアメリカ人は争ってこれを購うであらう。そして一心不乱にポコポコ水音を立てながら一日じゅう煙草をふかして実験している光景はたしかに一見するに価するものであった。彼が一年くらいで帰ってきてしまったのは、この苦心の水煙草の装置が予期に反して少しも売れなかったためであるらしい。そのMが私にこう言った。

「あんた、船医になったらどうだ？　そうして、向こうに着いたらスタコラ逃げちまうんだ」

それは天才的な考えだ、と私は叫んだ。ぜひそうしよう。

しかし君は向こうに行っても研究なんぞする気はないのだろう、と彼が訊いた。どうするつもりだね？

精神薄弱児施設に手紙を出してあるんだ、と私はいった。そういう相手ならきっと僕に親近感を抱くだろうからね。

なんという頭の良さだ、と彼はうなった。

そこで私は、すっかりこの計画に満足し、早速ノコノコ或る船会社に出かけて行った。

ところが敵もサルモノである。応対にでた係長は、私が船は未経験だから試しに一航海乗せてもらえないかと述べると、それでは困る、なにしろ見物が目当てですぐやめてしまう医者ばかり多い

ので、当方としては最低三年の契約をして貰わねば、とまるでこちらの魂胆を見すかしたような話であった。そのでっぷりした係長は、契約という言葉をかめしく何遍も使用した。話を聞きながら私は、たいへん駈足の苦手な私がどこか見知らぬ異国の波止場を一生懸命ドタバタと逃げてゆき、この肥満した男が片手に契約書をふりかざして凄じい勢いで追っかけてくる幻想に悩まされた。あまつさえこの係長は、私が自分は神経科の医者なので手術は苦手だと本音をもらすと、うちは貨物船が多いですから荷下ろしのときなど怪我人が多い、指がちょんぎれる、足がちょんぎれる、頭が割れてしまうのまである、などと私をおびやかさえたのである。

そんなことがあってから、去年の十一月になって全く唐突に、水産庁の漁業調査船が船医を探しているという話があった。その船は大西洋でマグロの新漁場開拓を行ない、欧州をまわって帰ってくる予定だが、もう数日後の出港で、まだ医者が見つからない。何科の医者でもいい、インターン生でもかまわぬという。なにぶんあまり突然の話ではあり、しかも一日二日のうちに決めなければならぬのだから、正直のところ私も躊躇した。私にしたって勤めは持っているし丸っきりの風来坊ではないのである。ところがMをはじめいろんな連中が面白がって私をたきつけた。これだけ寄航地の多い船にはすぐ乗れるものじゃない、逃げる逃げないは別として、まあ今度はブラリとあちこち下見をしてきたらいい、それにマグロがたらふく食えるじゃないか。たしかにその船は、シンガポール、スエズ、リスボン、ハンブルグ、ロッテルダム、アントワープ、ル・アーヴル、ゼノア、アレキサンドリア、コロンボと寄る予定で、いささかの見物はできそうである。

水産庁に電話をしてみると、向こうでは大喜びで、実は乗ることになっていた医者が都合でやめ

てしまった、ようやくやはり神経科の医者を探したところ医局の許可がおりずこれもダメになつてしまった、そんなことでもう半月も予定がのびているが、これ以上はのびせないからドクターなしで出港しようと考へていたところだという。結局私は自分でも半ばアツケにとられていゝうちに、なんとなく乗ることに決めてしまつたやうだ。私のいる医局では翌春教室主催の学会をやることになつており、果して許可してくれるかどうか危ぶんでいたところ、教授は人間を見る目を持っている人で私のことはすっかり諦めていたらしく、意外に簡単にオーケーになつた。なにしろ私はもう何年も医局にいるくせに論文一つ書こうとはしないのである。医局にいると大抵心理とか病理とかの研究室に配属され、いやでも共同研究か何か押しつけられてしまうものだが、私はそんなものを命じられぬよう、小部屋の一隅に『宇宙精神医学研究室』なる看板をかかげ、自らその主任と称し、そこに隠れて空とぶ円盤の書物なんぞばかり読んでいたのである。

その他の障碍も案外スムーズに片がつき、いよいよ船に乗りこむことに決定してしまつたとき、私はかえつて慌てだした。出港まであと三日しかないのである。私は、いくらなんでもこつちだつて準備があるからせめて二三日出港を延ばして貰えぬかと交渉したが、これがてんでダメであつた。ゆつくり考へられて又ぞろやめたいなどと言ひだされてはかなわぬと役所でも考へたのかも知れない。

ところで照洋丸というその船の大きさであるが、最初私が聞いたときは八〇〇トンばかりのとこであつた。これはちつとばかり小さいなと思つていゝと、水産庁の役人の話ではそれが七〇〇トンとなり、船長の話では六一〇トンとなり、役所で貰つたパンフレットによると六〇二トン九五と

書いてある。どうも段々と小さくなる。このぶんではいざ実物を見るとときにはポンポン蒸気くらいに縮小してしまいそうである。

しかし船を見に東京湾まで行くと、照洋丸は白く塗られたなかなか瀟洒な船で、ちゃんと鉄でできていた。もっともさすがに大きくはなく、翌日出港するという宗谷の傍を通ったときはそれが小山のように巨大に見えた。医務室もなかなか完備しているが、船医の居室には正直のところガツカリした。いくら狭くても個室が貰えるものと思っていたのに、二段ベッドの二人部屋だったからである。幸いなことに、同室の三等航海士^{サード・オフィサー}は、ときにフカのごとき不気味な目つきで人を睨む悪癖を有するほか、極めて気持のいい男であつたのは悪魔のハカライといふべきで、海上では船が全世界であり、個人の世界は居室だけに限られるから、万一カンシヤクもちでネゴトもちでヤブニラミでキンキラ声の、かつ大ボラフキでオセツカイでカサツカキでダツチョウの男なぞと一緒にゐた日には、そのユーウツさは比類ないものであろう。もっとも贅沢は言えぬので、士官^{オフィサー}を除いた一般船員はみんな船底の大部屋であり、ここでは個人的生活はわずかにカーテンをおろした寝棚ひとつの面積に限られている。

さて、それからの三日間というものの、怠惰なる私にとってはまさに世界の終末がきたかと思われた。なにしろ私はめったに床をあげぬほど無精者なので、手際よく荷物をつくりあげるなどという芸当は生れつき不可能なのである。私はカバンの蓋など開け、その中に幾冊かの書物と衣類をつめこんだが、それだけで疲れてしまい、すでに半分ほど飽きてしまい、果ては茫然としてマンガなど読みだす始末であつた。しかるに航海の経験をもつ連中が現われていることを言う。そのたび

に私は、インド洋はさぞかし暑かろうと半ズボンなどをつめ、冬の北大西洋はさぞかし寒かろうと登山に使うヤツケなぞをつめた。「なだ・いなだ」というふざけたペンネームを有する日が現われ、いいかね、山みたいな大波がくるぞ、コップでも何でも忽ち木っ端ミジンだ、などと大仰なことを言うので、私はわざわざ金属性のコップ、灰皿などを買いこんだ。Aという心理学者で国際ゴロミたいな男が現われ、フカを機関銃で射つのは面白いぞと教えてくれたが、機関銃を買いこむわけにはいかず、ただ彼が船中で飲むコーヒーのいかに美味であるかを力説するので、わざわざネスカフェーなど買いに出かけた。その間、私はそれまでの勤務にカタをつけねばならず、船の検疫と予防接種に立会ったり、海運局で船員手帳を貰ったり、夜は夜で飲みに出かけなければならなかった。

私は支度金をもらったので、カメラやナイロンシャツやボールペンなどを購入し、すっかり物持ちになり、荷作りは益々面倒なものになってきた。あまつさえMが現われ、もっとこまごました日用品が大切だ、そんなもので向こうで金を使うのが一番つまらんぞと言うので、歯ブラシ、鼻紙など商売できるほど買いこみ、ほとほと途方にくれ、こまごましたものなんて考えだせばキリがないから、しまいにはカンシヤクを起し、もう何がきたってこれ以上入れるものかという気になった。

しかし彼等はなかなかいいことも言ってくれた。Mは、ミヤゲなんて買わずに一杯でも多く酒を飲めと言った。それからスケッチブックを持ってゆけとも言った。スケッチなどする閑はないだろうという、いやいや、長い航海ではのんびりスケッチなどしないと時間を持て余す、写真と違ってまた格別の味わいがある。私はなるほどと思い、画用紙と鉛筆を羊に食わせるほど買いこんだが、結局一枚の絵も描きはしなかった。またAは、ミヤゲに風呂敷を持ってゆくといいと言った。そんな

なもののさらさら持つてゆくつもりはないと答えると、いやいや、外国の街を歩いていてひょっと思
いがけない親切を受けるときがある、御礼しようとしてもこっちは金がない、あっても金ではま
ずいことがある、そういうときにやるには絹の上等なものを買ってゆく必要はない、百貨店など
くれて使うにも始末に困る奴を集めてゆくがいい。私はなるほどと思い、貰い物の風呂敷を何枚か
持参したが、これもちっとも効果的に使いはしなかった。と言うのは、いざそれをあげたいと思う
女の子などに会ったときにかぎり私は風呂敷を持ちあわせていなかったからである。私はけしから
ぬエジプトのバイロットなんかになんかにそれを与える羽目になったり、思いがけず世話になった日本人の
ところに致し方なく置いてきたりした。そういう日本人のお宅では、ミヤゲに持ってきた風呂敷と
いうからには恐らく上等のものと考え、あとで見ればデパートのマークなんぞあるのでさだめし
キれたらうと思うが、これは私の責任ではない。

辛うじて十一月十五日、出港の二時間前になって、私は行李とトランク二箇をフウフウ言いなが
ら船に運びこんだ。それをほぐしたり並べたりしていると早くも時間である。この三日間でクタク
タの上に少し酔っぱらっている私には感慨なんて起りようがなかった。それでも無数のテープが潮
風になびいて音を立てたときにはちょっといいものだと思つたが、じきにこれは大変間の抜けた
ことであることがわかった。なぜなら曳船にひかれた船は容易なことでは岩壁から遠ざからず、そ
の間見送り人も船の者もテープを抑えたり手をふったりしつづねばならぬので、終いにはすっか
り手がくたびれてしまうのである。いっそのこと、双方でロープかなにかをエイエイ曳きあい、敗
けたほうがザンプと海に落ちこむことにしたらどんなものであらう。

ともあれ、こんなふうに私は、自分でもオヤオヤと思っているうち日本を離れてしまったと人は思うだろうが、実はその翌日ちゃんと新宿の裏町を歩いていたのである。

船はその日の夕方千葉の館山に着き、ここで米を積みこむため一日半停泊することになった。館山に近づくところになると、船の非番の連中は汽車の時間を調べて帰宅の用意をはじめた。なかには家にほんのちょっと寄るだけですぐまた汽車に乗らねばならぬ遠距離の者もいる。そのくらい海で暮す人にとっては陸と家が貴重なものになっているのだらう。こんなところから帰ってゆくなどとは考えてもみなかったから、どうしたものかと迷っている私にむかって主席航海士チヤウシヨウカイシが言った。

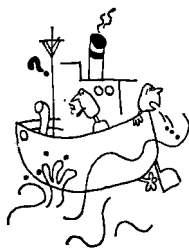
「ドクター、海に出てしまうとね、あのときもう一晩昼の上で寝ておけばよかったとあとで思いますよ」

私はこの言葉に感心し、その夜おそくノコノコ東京に戻ってきた。翌日新宿をぶらつき、はじめてノンビリした気分になり、映画を見たりパチンコをやったりした。そうしていると、なにか密入国でもしたみたいなの、へんに擦くすりたい気分がつきまよってくる。なにぶん今度の航海はだしぬけに決ったのでごく一部の人のしか知らせることができず、おまけに私はホラ吹きなので友人の大半は信用せず、ひどいものになると私が帰ってきてからも「マグロ船に乗ったそうだが本当か？　そこらに隠れてたのじゃないか」などと言われたが、事実は一日だけ余計日本にいたのである。

このとき私は誰にも戻ってきたことを知らせなかったけれど、Aにだけは或る用件を思いだして電話をかけた。電話口の向こうで、さすがにビックリしたような声が叫んだ。

「なんだ？　もう逃げちゃったのか！」

これが海だ



今度こそ日本は本当に遠ざかって行つた。しかし、やはり感慨など起す閑はない。私は自分の荷物をようやく片づけ終り、隣りの医務室の点検をはじめた。タイルの床には船が持つてゆくミヤゲ物の箱や薬品の箱が積みあげられ、大げさに言えば足の踏場もない。まだ何がどこにあるかも皆目わからない。医務室には一坪足らずの小部屋がついており、薬戸棚とベッドが一つあるが、そこもいろんな箱で一杯で、その間にこの船がハワイに行ったときのヤシの実がひとつ、もう茶色に乾からびてころがしてある。

大きな汽船はいざ知らず、航海中の船は相当に騒々しいものだ。殊に医務室は場所がわるく、エンジンとスクリュウの響きがじかに伝わってきて、手術台はぶるぶる震え、ドアはひっきりなしにカタカタ鳴っている。小部屋のベッドは病人用のものだが、震動と噪音のため、こんな所に寝たら陸の病人ならたちまち悪化してしまいそうだ。私は戸棚の引出しを点検し、箱につまった予想外に

多い薬品を調べ、注射器やガーゼを消毒し終つてはじめて落着きを取りもどした。私のことをすべてデタラメな男と思う者があつたら豚に食われるであらう。そうしているうちにも早くも幾人かが薬を貰いにきたが、船医なんてもうメチャクチャに閑であるとか聞かされていた私にはちよつと意外であつた。聞けば長い航海に出る前にはこれが最後と夜ふかししたり酒を飲んだりする者がいるので、腹くだしとか風邪ひきとか、出港の日には必ず病人が多いとのこと。

すでに夜になっていて、デッキに出てみると周囲は真暗である。船全体が意外に暗い。明るくしておくと視界が利かないため灯火はみな遮蔽してしまふからである。黒い海上を暗い船がゆつたりと上下しながらなかなか堂々と進んでいる。船首にかきわけられた波が白く泡立ち、湿っぽい風が耳元をすぎる。やがて、右手の水平線上にほそい三日月がかかり、ひとすじの銀光を黒い海面に流した。そうして潮風の匂いをかぎ、船体がゆつたりと傾き、のしあがり、沈むのを感じていると、はじめて或る種の感動が私の胸に湧きあがつてきた。

翌日、次第にうねりが大きくなつてきた。日本の方角は雲がたむろし、島があるようでないようで判然としない。前甲板は完全に波に洗われている。船首に波がぶつかつてくだけちると、それが無数のしぶきとなつて船上を横ぎる。波は遠くの方は泥か粘土の造り物のように見え、近づくとつれて生きてのたくつて躍っている。日が雲に隠れ、また現われ、それにつれて海面は刻々に変化する。その変化は千様であり、山のそれよりもっと素早く、また荒々しくとりとめなく、一定の規範を有しない。私はしぶきのこない船尾の甲板に出て、潮騒と風の唸りを聞き、溶岩のうねりのように湧き立つ波頭を長いこと見つめた。それは原始の鎔鉱炉で、最初の生命がこの地球上に生じて

きた場所にいかにもふさわしく、重々しく鉛色に湧きかえっている。金具や索具に塩の結晶がこびりついており、指が塩っぱく、特有のねっとりした感じになる。船室に戻ると、潮の香が身体全体に沁みついてるのがはっきりとわかる。

私は今や広漠とした海の気をあびて大いに嬉しくなり、たちまちにして一つの詩のごときものをひねくりだした。

これは海だ

海というものだ

ああ その水は

塩分に満ちている

さすがに私はこの出来栄えには感服しなかったので、今度はもっと本物の詩を、懐愴なまでに美しいブレース・サンドラスの詩の一節を口の中で呟いてみた。

血だらけのけものの体を

夕方

海辺づたいにひいてゆくのは このおれだ

おれが行くとき